

## 新しい保育の形

藤森 平司

### 世界の教育・保育改革

ユネスコは、「万人のための教育」というのを2000年にまとめ、それと時を同じくして21世紀の「知識基盤社会」に対応した人材育成を目指して、OECDの教育委員会によるプロジェクトである「乳幼児における教育と養護（ECEC）政策に関する調査をしました。その結果、「生涯教育」の第1ステージとしての乳幼児における教育と養護（ECEC）において、保育の「質」に重点を置いた「出発点を力強く」と就学前教育の質改善に向けての政策提言を2001、2006年の2回にわたる調査から出しています。その中で、どのような保育、教育がふさわしいかという視点から「五つの保育カリキュラム」を紹介しています。

この五つの国の代表的な保育カリキュラムは、1、経験による教育（ベルギー）、2、ハイスコープ（アメリカ）、3、テ・ファリキ（ニュージーランド）、4、レッジョ・エミリア・アプローチ（イタリア）、5、スウェーデンの保育カリキュラムです。それらのカリキュラムに対して、日本ではどのようなカリキュラムが質を高めるために有効なのでしょう。今こそ、日本におけるカリキュラムを構築する必要があります。

世界で行われている保育カリキュラムの共通点は、先生が前に立って、ある知識を子どもに覚えこませる一斉、画一的保育、教育から、子どもが自ら育つ力を信じ、子ども自ら選択し、その選択によって活動することを保証しようとすることです。

また、インクルージョン保育ということが言われています。この言葉は、初めは障害を持った子に対しての保育に使われていましたが、最近は、「全児童、全教育を」ということが言われています。大人は、さまざまな、子どもに対しての刷り込みを持っていますが、そこから脱却して、その子自身の発達、個性、環境を優先的に見て、計画しなければなりません。さまざまな刷り込みは、国によって、人種によって、貧富によって、男女によって、障害によってなどです。そして、今の日本での最大の刷り込みは、年齢です。保育指針に書かれている年齢も、発達過程であり、年齢は目安に過ぎません。個々の発達の連続性を考え、それを丁寧に保障していくような保育に変えていかなければならないのです。

### 新しい保育（環境を通して、人との関わりの中で育つ保育）の提案

子どもの発達には、子ども自ら環境に働きかけて、その環境との相互作用により促されていきます。歩き出すという発達も、歩く手順を教えることではなく、歩きたくなるような心情を引き出し、歩きたくなるような意欲を持たせ、充分と歩くことができるような環境を用意することです。そして、その環境の中で自己を発揮するために保育者は、子どもを見守っている（愛着）ことが必要なのです。

その時の環境として、他の子が歩く姿を見る、歩こうとしている姿を見ることは、心情、意欲を持たせ、行動にあらわそうとするためにはとても重要なことです。その姿を見ることができ、他の子どもという環境は、少子社会の今は施設保育でなければ用意が難しくなっています。子ども集団が必要なのです。知識を伝達する上でも、子ども同士で教え合うことにより、伝承されていくことになるのです。

このような保育に変えるときには、集団というとらえ方を変えていかなければなりません。

ん。大人から子どもに一方的に伝えていくような集団、統制のとりやすい集団、保育者が主導的に引っ張っていくというような集団は、大人と子どもの直線的な関係であり、集団機能を果たしていないのです。今後は、子どもの主体的な活動を促す環境、子どもの自発的な活動としての遊びを保障する環境、子ども一人一人の特性に応じた環境をどのように創造していくのか、人とかかわりをどのように作っていくのか、子ども集団の中で行われる「協同的な学び」をどのように意図していくかが、保育の目標になります。

### 1. 主体的な活動（生活の場）

主体的な活動をする子とは、自ら課題を見つけ、自ら考え行動する子(やらされる、やってもらった活動から、自分でやる活動)のことです。そのために、自ら環境に働きかけることをしなければなりません。もちろん、この環境とは、空間だけのことを言うのではなく、人的(保育士(チーム)、異年齢、地域)、物的(特定の活動を規定する遊具から、自分で工夫する遊具)、空間(自然などの屋外空間、コーナーなどの室内空間)があります。それらの環境の中で、子どもたちは、無理のない選択と自己決定、発達過程の確実な習得をする保育に変えるためには、個人の発達や人格の発達を犠牲にして作られている、年齢の刷り込みによるカリキュラムでの保育を見直さないといけないでしょう。そして、園では、個と集団を保障(個と集団の両立から、相互作用)する場を作っていかなければなりません。

### 2. 自発的な活動（学習の場）

保育室を、あそびのミュージアムとし、子どもの自発的な活動、子どもが主体的にかかわる環境を用意します。そして、子どもは、受身型から参加型へ変わり、「教える保育」から「子ども自ら活動する保育」への発想の転換をします。保育者も、どちらかと言うと、ティーチャーではなく、ファシリテーターになります。教えるのではなく、引き出し役とか、進行役になるのです。やってあげる保育から、それぞれの子どもの違いを認め、それに寄り添い、見守る保育です。そして、子ども集団を、ねらいに応じた集団、子どもにとって、生き生きと活動できる集団、子どもにとって、発達が保障される集団を考え、クラス集団と保育活動集団を柔軟的に考えます。

### 3. 一人ひとりの特性

与える教育。保育から、一人ひとりが自ら活動する保育に変えるとき、当然、何を与えるかという課題から、何をそれぞれが受け取れるかという課題にかわります。したがって、当然、「平等」という考え方もかわってきます。みな等しく同じものを与えることから、みな等しく同じものを受け取れるということになります。この考え方に「インクルージョン」という考え方が必要になってきます。「インテグレーション」から一歩進めた考え方です。

### 4. 人とかかわる力

集団の考え方もかわります。産業主義社会のころの大工場システムでの効率化ということで行われた集団に対して「一斉」ということから、個々の違いを認め合い、ともに生きる社会「共異体」のなかで、「協同的な学び」を意図していきます。

## 5. 自立

今の若者の課題は、「自立」です。これは、早く放り出せば「自立」するのではなく、丁寧な関わりから生まれてきます。子どもは、各自が主体であることの大切さを感じていき、自分の好奇心や欲求が満たされるなど、充分「受容」されることによって、次第にやりたいことを「自己主張」し始め、それを他人に伝えようとします。それをきちんと受け止め、子どもにきちんと返すことにより、次第に他の人と共に生きることを喜びと感じ、「自律」という自分を制御する力が生まれてきます。そして次に、他人の痛みを知ることによって、他人の喜ぶことをしようと他人の手助けをする「他者支援力」という力が生まれてきます。その様な発達をきちんと保障するような保育が必要になってきています。

自由という考え方は、ずいぶん昔から言われてきました。子どもを自由にさせようといひます。しかし、この自由という言葉は、ずいぶんと誤解があります。それは、放任とか、勝手とか、わがままなどと、とても近いものがあるからです。しかし、人それぞれ、自然も含めれば、みんな自由を持っていますし、それを保障しなければなりません。そこにルールが生まれます。ルールは、自由を奪うものではなく、お互いに自由になるためのものであるということを再認識する必要があります。共生の考え方が必要になってきます。しかも、そのルールを他人から言われて従うのであれば、自由ではなくなります。そこで、自律の力が必要になってきます。

「自立」とは、社会の中で、共生をする概念と、他に貢献する概念を持つことであり、「自分では何ができるのか」と同時に「他人には何を頼むのか」ということがわかることでもあるのです。

### 関係性を重視した保育

集団の考え方もかわります。産業主義社会のころの大工場システムでの効率化というこことで行われた集団に対して「一斉」ということから、個々の違いを認め合い、ともに生きる社会「共異体」のなかで、「協同的学び」を意図していきます。

#### 1. インクルージョン保育

教えてあげる、やってあげるという考え方から、子ども自ら環境に働きかけて行動するという、子どもの主体的な活動を保障し、それを援助するという保育に変えた時、カリキュラムの考え方を考え直さなければならない部分があります。さまざまな、子どもに対しての刷り込み、大人の思い込みから脱却して、その子自身の発達、個性、環境を優先的に見て、計画しなければなりません。人は、さまざまな刷り込み、平均的な思い込みをもっています。国によって、貧富によって、男女によって、障害によってなどです。そして、今の日本での最大の刷り込みは、年齢です。保育指針に書かれている年齢も、発達過程であり、年齢は目安に過ぎません。個々の発達の連続性を考え、それを丁寧に保障していくような保育に変えていかなければならないのです。

#### 2. コーヒージョン保育

最近、引きこもりの若者が増えていることが問題になっています。その多くは、自分の部屋に閉じこもって出てこないというのではなく、人と関わることをストレスに感じ、そ

れを避けようとする若者です。そこで、それぞれの違いを認め、個々の発達を保障することを目指してだけでなく、この個を結び付けていく、関係づけていくことが必要になります。よい集団というのは、よい個の集まりのことであり、よい集団はよい個をつくって行きます。そこで、それぞれの異なりを認め合い、その個がお互いに協働する社会を作っていくことが求められてきます。そこでは、自由という考え方の見直しが必要になります。昔から子どもを自由にさせようといひます。しかし、この自由という言葉は、ずいぶんと誤解があります。それは、放任とか、勝手とか、わがままなどと、とても近いものがあるからです。しかし、人それぞれ、自然も含めれば、みんな自由を持っていますし、それを保障しなければなりません。そこにルールが生まれます。ルールは、自由を奪うものではなく、お互いに自由になるためのものであるということを再認識する必要があります。共生の考え方が必要になってきます。しかも、そのルールを他人から言われて従うのであれば、自由ではなくなります。そこで、自律の力が必要になってきます。個を認め合い、よい集団を作っていくためには自律が欠かせないのです。

### 3. コーナーからゾーンへ

保育室という空間は、子どもの生活と活動にとって欠かせないものです。子どもたちは、園に来ると「何をしようか」を考えます。そして「誰としようか」「どのようにしようか」「何をしようか」ということを考えます。それが、動機であり、意欲です。そして、これが世界ではプランです。この心は、子ども自らわき出る気持であり、指示したり、やらせようとした途端に、その意味は違ってきます。しかし、子ども自らやろうとしても、自ら使えるような時間、空間、物などが用意されていなければなりませんし、一緒にやりたいと思える友達がいないければなりません。そのために保育室という空間は、子どもの生活と活動にとって欠かせないものです。

外国では、保育室の真ん中に広場的なものを置き、部屋の隅に様々な子どもが自ら選択し、活動する場所を作りました。そこで、そのような場所を「コーナー」と呼びました。また、アメリカなどでは、一斉に何かをやらせるのではなく、子どもが興味関心をもったことが自らやれるような場を用意しました。そこで、そのような場を「インタレストセンター」と呼んだりしました。しかし、「コーナー（かど）」も「センター（中心）」も子ども主体と言っても、結局はある閉じられた空間を用意し、そこでの活動を固定してしまうような気がします。もっと、子どもによって流動的に空間が構成されたり、他の空間と融合したり、小集団から広がりのある人間関係が作れるような空間を用意する必要がある気がします。それは、コーナーの作り方であり、そこでの子どもの過ごし方ではあるのですが、コーナーという言葉を使うと人によってとり方が異なってしまうこともあるので、私はそれを、ゾーンと呼ぶことにしました。そして、そのゾーンは子どもによってゾーニングされていきます。

### 小学校への移行

OECD加盟20カ国の乳幼児期の教育と養護（ECEC）という書籍の中では、乳幼児期政策に影響する社会、経済、考え方や研究の諸要因が記述されています。現在、どの国でも幼児教育から小学校教育への移行をどうしたらスムーズに行うことができるのか、就学前教

育の在り方を考えることは政策課題となっているようです。それは、その移行は、一般的に成長発達への刺激となりますが、なにもせずに突然小学校教育にあげたり、あまり深く考えずに安易に扱われたりすると、とくに児童にとっては退行や失敗の危険性を帯びることになると警告しています。

ECEC パートⅡの中で、就学への移行での成功例が示されています。それは、小学校への移行では、「学校準備」方法ではなく、社会教育伝統を内在する国々で実践されているような、就園年齢は人生に対する幅広い準備と生涯学習の基礎段階とみなした取り組みを推奨しています。そのおもな目的は、「子どもたちすべては、あらかじめ特定された知識や習熟度を達成することよりもむしろ、学習に対する意欲と好奇心、学習における自信を高めていくべきである」ということになるのです。

日本では、OECD の学力調査では次第に下降傾向を呈しています。そのために、日本では「ゆとり教育」を見直し、「総合的学習」が縮小されました。しかし、低下の傾向は、かなり前から予兆がありました。先の主目的である「学習に対する意欲」が調査国中、最低でした。また、「自信」がないのも日本の子どもたちの傾向であると言われています。それに比べて、特定された知識を多く持ち、物事の習熟度はかなり高いでしょう。また、それが今の日本での主目的になっています。

また、学習形態も、ECEC で推奨されている方法は、トップダウンで、指導が中心になる初等教育教授法ではなく、乳幼児教育教授法が必要であり、それは、環境に対し自発的に関わり、探究心を持って能動的に環境に働きかけ、縦から子ども同士、グループプロジェクトというような横の動力に持っていくような教育方法が必要になってきます。

### 施設型保育での育ち

今の子どもの育ちにおける課題をこのように眺めてみると、少子時代での課題は、子どもが社会の中で育つことが困難になり、子どもたちが社会の一員になる機会が少なくなることです。また、子どもたちが、子ども集団を形成し、その中での学びをするようになるためへの乳児からの移行が、家庭、地域の中では行われにくくなることが問題になってきています。そのために、0 歳児からの発達をきちんと通して、子ども集団を基盤として、人とかかわる力をつけていき、自立をしていく基礎を培う場としての施設保育は、ますます重要になってきます。時代をきちんと見つめ、時代に先行し、今を生きる子どものために、今の時代に必要な保育に変えていくことが求められています。